立嶋のこと勝浦のこと　取り留めのない話

○ 宗次郎じいさんの事

宗次郎じいさんは、小学校の校長をやっていたことがあって、よく生徒の頭をバリカンで刈ってやっていたそうだ。　葬式には立嶋の家からあの山の上の墓まで、葬列が続いたときいている。

宗次郎の次女歌子の長男として私が生まれ、なんと初孫の栄誉に浴したわけだ。　私の生まれたのは昭和２０年だから、えらい年月が経っている。

終戦後の社会の混乱の中、父母は小さな私を連れて勝浦に戻り、私は何年か勝浦で育ったが、勿論、その記憶はない。

じいさんは私の頭をいつも撫でて『歌子の寝かせ方が悪いからゆがんでしもうて』と口癖に言ってたそうで、私の頭はじいさんが懸命にモミほぐして矯正したにもかかわらず歪んだままで今日に至っている。

じいさんの漕ぐ伝馬船で勝浦湾内を回遊したことがある。　中学生の夏休みを勝浦で過ごした時である。　宗次郎じいさんはゆっくり櫓を漕ぎ、幾度か伝馬船を止めては湾内の漁船や養殖筏の

漁師に声を掛けていた。　狼煙山のあたりを回って漁協の方へ取って返し、マグロの取引や、製氷所、漁業無線局を案内してくれた。

製氷室から滑り落ちてくる大きな氷、その迫力がすごい。　どうゆう仕組みであんなでかい氷がどんどんできるんだ。

遠洋で操業するマグロ漁船との絶やさぬ無線連絡は驚きである。いやあ、すごいね、みんな世界の隅々まで行って仕事してるんだ。

○　立嶋の家のこと

前の立嶋の家は船大工が建てたとかで、なにか無骨さのある家だったと記憶している。　表を入ると右手に三和土が奥の水屋まで続いている。　水屋の横手は小さな庭になっていている。　三和土にそって左に畳の部屋がふたつ、奥に厠がある。

洒落て言えば京都の町屋作りである。（少し違うかな）　やはり間口で税金を取られていた時代の名残りなのか、間口は狭い。 奥行は、母歌子の言うには、海の船着きに出たという。　裏手は築地というからには埋立地である。　そうすれば立嶋の裏手は昔は海で、そのころの話であろうか。

奥の階段があり二階に上がれる。　二階といっても上がったところはもう屋根裏部屋に近い。

この二階に恐ろしいおじ達がごろごろしていて、二階の小引き戸から下に飛び降りろという。 おじ達が順番に飛び降りて見せる。次はお前だといわんばかりの時に、下から、おばたちの叱責があって危機は去った。

二階の小窓からは、瓦屋根の上に出られるようになっている。玲児おじは、瓦屋根で寝そべっているところを米軍機が飛んできて機銃掃射を受け、命からがら家に逃げ込んだという。

家を建て替える時、便所の下に埋まっていた壺が良い値で売れたとかどうとか。　これには話のウラが全く無い。

○ 泰おじのこと

わたしたちが新婚旅行で勝浦を訪れた時、泰おじからお祝いを頂戴した。　幾つかの意味で、あの時頂いたお祝いの何物にもかえがたい有難さをいつも感謝している。

私が中学生だかの時に、泰おじが甲子園を訪ねてきたことがある。　瀞八丁のプロペラ船に事故が多いので、ジェットなんとか

にするアイデアを思いついたそうで、それを相談しに大阪大学の教授を訪ねての帰りだとのこと。　一晩中、そのアイデアをおやじと話して勝浦へ戻ったようだが、アイデアが効をなすことはなかったようだ。

今では、瀞八丁はプロペラ船ではなくウォータージェット船が活躍している。　それを横目で見ているのも悔しいが、結果ともかく、一度考えたらとことん熱を入れるのが立嶋の血筋のいいところかな。　あのアイデアが当たっていれば今頃は、と思わなくもないが、でも、当たって成功しなくて良かったのかも。

母の亡くなった時にきてくれた泰おじは、暫く近くの瓦木町界隈を回ってきて『歩いてると、歌子ねえさんに会えるようで』と。

昔、母歌子が勝浦を出る時、みんなが泰にはそのことを内緒にしていたそうで、後日、おじは『あのときは、歌ちゃんがいつのまにかおらんようなっての』と言っていた。　泰の姉ちゃんっ子のお話。

○ 晃おじのこと

忠魂碑の名簿碑に立嶋晃の文字が見える。

戦時中の勤労動員で引っ張られ、爆撃だか機銃掃射を受けて製図板を前にして死んだという。 中学生（旧制）だったそうだ。

○ 精吾おじのこと

精吾おじは甲子園に滞在したことがあり、私と弟の幸三が小うるさいといって二人を納屋に閉じ込め外から釘を打って、精吾おじはゆっくり昼寝。

『一雄、空手教えてやるか』と言って、一度も教えてくれた事がない。 わたしが大学で空手部なんぞに入ったのも、なんか精吾ちゃんの暗示にかかっていたのかもしれない。

へそ曲がりで天下に名がとおり、母は『そんな事をしていると精吾みたいになるぞ』と。 でも、あこがれの精吾ちゃんでありました。

へそ曲がりがうつらなかったのがなによりも幸せである。

社会人になって群馬に精吾ちゃんを訪ねたときは、スバル３６０で駅まで迎えに来てくれ、その夜、ふるまってくれた夕食のす

き焼きはまことに旨かった。　最後に、『一雄、うどん喰え』と言ってくれた饂飩は、見るとちっちゃな子が両手で握りしめ、指の間から･･･。　それでも精吾ちゃん、『うまいぞ、くえ』の一言･･･。いや、旨かった。　紀理子の握力もすごいもんでした。

○ 玲児おじのこと

玲児おじは東京府中市にいたころ近所だったこともあってよく行き来していた。　最初に玲ちゃん宅を訪ねたときである、玄関を入ると『かずおちゃんだあ』と二人の子供が飛び出してきて、私と顔が会うやびっくりしてまた奥へ走って逃げてしまった。いとこが来ると言うので多分同じ年齢の子どもの『かずおちゃん』を期待してたのに、訪ねてきたのはおっさんだったのに驚いたのか。　そんなにビックリするような顔でもないはずではあるが。

智が病気で九死に一生を得たのが医者を志すきっかけになったようで、頑張った頑張った。

いとこ会で見た亮が玲児おじにそっくりなのにはびっくり仰天。そこには亮でなく玲児おじそのもので、目から髭から腹の出具合から。　『いやあ、仕込んで来たな』と、こちらもにんまり。　亮

も得意げ。

玲児おじには、成城学園の海の家だった千葉県富浦から何度か葉書をもらっている。　今考えると、あまり勝浦に帰らなかった玲児おじにとって、富浦はそのまま勝浦だったのかも知れない。

○ 嘉子おばのこと

よっこちゃんは、いとこのつもりでいる。
いとこ会の口火をきってくれた時も、よっこちゃんの心はいとこである。

○ 忠雄おじのこと

忠雄おじは末っ子で甥のわたしと３つか４つしか違わない。私が幼少、勝浦でよちよち這って忠雄ちゃんと芋を争っていたそうだが、もちろん記憶にはない。

中学生の勝浦滞在の時、忠雄ちゃんが描いてくれたキャッチャーボート（捕鯨船）の絵が私にはリアルで新鮮で、私はそれを何度も書き写した。

阪神の大震災の時、忠雄おじが私と嫁と同じ夜行バスで神戸へ

行ってくれたのを、ありがたく覚えている。　夜行バスの中で寝ている忠雄おじの横顔がおふくろ（歌子）そっくりで、いやびっくり。

雑誌か何かの写真でみた篤史のリングサイドでの忠雄おじも、いつも変わらぬ無口のおじそのまま。

○ 勝浦での夏休みのこと

中学生の夏休み、勝浦のどこだったか、サメのひれや尻尾が多量に天日干しされていてハエがたかっている。　聞くと中国に輸出するのだそうである。　へー、中国人は喰うもんがないんだ。ところが、これがまた逆輸入されて、日本でも最高級の食材になると聞いてびっくり。　世の中の仕組みがよくわからないね。

高校性の夏休み、宗次郎じいさんの計らいで勝浦漁業無線局に泊まらせてもらった。　夜中、受信機からひっきりなく聞こえるモールス信号の交錯するなか、寝ていた通信士が突如ガバっと跳ね起きて受信紙に電文を書き取り始めた。　私も起きて、ただただ感動である。

寝ていてもモールス聞いてたんだ、イトー、ロジョーホコー、

ハーモニカ、すごいなあ、俺もそのうち・・・。　もちろん、そんな芸当はいまでもできない。

『一雄、この指ひっぱってくれ』　・・・　ぶっ。

夏休みに勝浦で覚えたのはこれだけである。

○ 母歌子のこと

おかあちゃんはあまり私を叱る事がなかったように記憶している。　私が病弱とされていたこともあるが、母の勝浦的おおらかさと理解している。　それでも一度本気で叱られた事がある。

傷痍軍人であったか片腕の紙芝居屋が周１回かなんかで来て、紙芝居をやって駄菓子を売る。　私は母から紙芝居を見るといって１０円をもらい近所の駄菓子屋で菓子を買って、紙芝居をタダ見した。　それを知った母は鬼のように怒った。　私は自分の行いを恥じた。　やってはならない事がある。　これは今でも私のひとつの曲げられない物差しである。

○ 大勝浦のこと

大勝浦への小学校の山越しは、私が『勝浦』に浸る大好きな道である。　ほかにも大勝浦へ抜ける楽な道があるようだが、なんとしても、この山越しが気に入っている。

正念寺の横の路地を入って、小学校の運動場を抜けて行く。 だらだらと越したところに那智から天満の浜が広がり、弁天島があって、右に荒磯が広がる。　白蛇を祭るといわれる弁天島には潮の引いた時は歩いて渡れる。

弁天島の湾の向こう那智山の山腹に那智の滝が一筋白く小さく見え、遠くにありながら滝の大きさに感じ入る景色である。　滝壺の覗ける飛龍神社から清涼な風を感じながら見上げる御滝もすばらしいが、ここから労なく、ぼおうっと眺めるのもこれまたありがたくて素晴らしい。

那智の浜には、補陀洛浄土に渡海するお坊さんの話があるが、私には重たい。

狼煙山ぞいの磯はお蛇浦と呼ばれるそうだが、荒磯といくつかの奇岩が複雑に並ぶ。　荒磯を這う波、奇岩を叩く波しぶきの繰り返し上がるのを見て飽きずに時間を過ごす、『あー、勝浦』で

ある。　少し風でもでれば最高の波しぶき。

もっと風がでれば・・・、あ、漁師さんごめんなさい。

○ ひいじいさんのこと

おまえのひいじいさんはシンガポールで死んだと母に聞かされたことがある。

その話を聞いたとたん、私の脳裏には、『マレーの虎・立嶋何某』が馬に跨り、異国の地を縦横無尽・神出鬼没・跳梁跋扈する姿が広がっていった。　早速、私は中学校で『満人グループ』なるものを結成し（３人）、血判状（赤インク使用）を作り、我ら将来、満人になってアジアを何とかと誓い合ったのである。　そもそも満人がどういう定義なのか、アジアが何なのかよく分からない、ま、それでも大真面目に。　お互い最期はシンガポールでと、これまた訳が判らない。

私の養護学校への長期入院で、中学校の満人グループも『おまえの留守中、守る』といってくれたものの消滅、それでもマレーの虎への夢とあこがれだけは私の脳裏に。

暫くして聞いたのが、ひいじいさんは立嶋を捨てて京都のヒトとシンガポールになんとかかんとか。　え〜え、そんな。

わたしが成人してからこの件を思うにつけ、マレーの虎でこそなかったが、京都のヒトとシンガポールまで、そんなひいじいさんを好ましく嬉しく思うようになった。

成り行きはよく分からないが、かっこ良くても悪くても、その時を一所懸命やった、それなりのケジメをつけたのだろう。　やっぱり、ひいじいさん、その情熱のある人柄がいいと、これまた、マレーの虎をひっくり返しての心酔。　オレはその情熱の血を引いているのかな。　でもオレ、今ひとつ情熱をだしてないよな。

よっこちゃんがシンガポールへ行った際、現地で調べてもらった事があるそうだが、なにも分からなかったと聞いている。